

2019 vol. 21

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

特集
アーティフィシャル・
マインド



ごあいさつ

近年、ビッグデータによる分析、AI、深層学習などの進歩はめざましく、社会にも浸透してきている。しかしそれらは人間のこころを凌駕するのでしょうか、あるいはどのような関係を持つのでしょうか。心理療法に関わる者としては、心理療法のプロセスや夢・描画すらビッグデータとして分析可能なのか、AIによるカウンセリングがどこまで可能なのか興味のあるところである。「情報」ではなくて「物語」が心理療法では大切と思われるが。さて本号の特集〈アーティフィシャル・マインド〉はそのような問いを扱いつつ、そこにさらにアーティフィシャルという語に含まれているアートも絡ませようとしているのがユニークである。この特集を受ける形で、今年度の「京都こころ会議シンポジウム」は「こころと artificial mind」という題になった。この2つの試みが、こころに機械がどこまで迫って、またこころの独自性が何なのかを明らかにする機会になればと思う。

2019年7月

京都大学こころの未来研究センター長 河合俊雄

こころの未来
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2019 vol. 21

目次

ごあいさつ	河合俊雄
01 巻頭言 人間が神になる未来を阻止しよう	西垣 通
〈特集 アーティフィシャル・マインド〉	
02 アーティフィシャル・マインドをめぐって	吉岡 洋
07 フォルマント兄弟インタビュー 人工音声の向こうに誰がいるのか?	三輪眞弘+佐近田展康+吉岡 洋
論考	
14 ロボットの感情	富山 健
18 機械にゲームができるのか? — タークからコンピュータへ	吉田 寛
22 人工知能は知識を持てるか?	久木田水生
26 ロボットに“あい”を宿すことはできるのか? — 寄り添いが導く新たなウェルビーイングの形	高橋英之
プロジェクト	
30 プロジェクト一覧 (平成30年度)	
31 こころの思想塾	佐伯啓思+吉川左紀子
32 こころ塾 — 医療および教育専門職を対象としたこころ学の講義	吉川左紀子
33 連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
34 こころの科学集中レクチャー	内田由紀子
35 持続可能な医療・社会保障に関する研究	広井良典
36 福祉と心理の総合化に関する研究	広井良典
37 〈見えない人〉の美術表現	吉岡 洋
38 組織文化とこころのあり方 — 日本における企業調査	内田由紀子+中山真孝
39 セルフの進化生物学	小村 豊
40 意思決定の認知科学	阿部修士
41 対人相互作用の心理・神経基盤	佐藤 弥
42 現代社会における〈毒〉の重要性	吉岡 洋
43 Savoringの科学	柳澤邦昭
44 こころワールドマップの作成	上田祥行
45 こころが豊かになる環境の選択と構築と共感の心理	上田祥行
46 こころの豊かさとその逆説性 — 心理療法にみられるこころの変化とその波及	河合俊雄
47 気晴らしと攻撃性のメカニズム	河合俊雄
48 生体情報測定によるオフィスワーカーの行動研究	中井隆介
49 シンギュラリティ後の生活者のこころのあり方について	広井良典+熊谷誠慈
50 つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさ	内田由紀子
51 感動の社会・神経基盤の研究、および行動変容に及ぼす効果の検証	内田由紀子+中山真孝
52 アジアと日本の精神性、幸福観、倫理観	熊谷誠慈
53 超高齢社会における現代日本の医療・保健・福祉にかかる倫理	清家 理
54 ポスト成長時代におけるこころの問題と変容	畑中千紘
55 ポスト成長時代の経済・倫理・幸福	広井良典
56 子どもの発達障害へのプレイセラピー	河合俊雄
57 鎮守の森とコミュニティ経済	広井良典
58 発達障害の読み書き支援・コミュニケーション支援	田村綾菜+小川詩乃+吉川左紀子
59 京都こころ会議	河合俊雄
60 新入社員の不適応予防につながるアセスメント法の開発 — 20代労働者のパーソナリティのクラスター分析	野口寿一
61 高齢者の認知能力に及ぼす運動スキルの影響とその神経基盤	積山 薫
62 センターの主な動向 (2018年4月~2018年9月)	
編集後記	

編集後記

私の知的出発点はカントにある。この哲学者は世界をカッコに入れて認識能力を分析したので、生命や環境を重視する現代の思想動向においては「悪者」扱いされたりするのだが、私が本テーマを考える背景にはカントの「自然の技巧」概念がある。(吉岡 洋)

もともと認識論という領域が専攻だったので、今号のテーマには様々な思いがある。「認識があって世界がある」のではなく、「行為や生命がまずあり、その派生物ないし手段として認識が生まれる」という理解が根本をなすのではないだろうか。(広井良典)

AIの進歩により、私たちは逆に人間や生命とは何かという問いに立ち返るようになったのかもしれない。単純な楽観論や悲観論だけではもったいないので、この時代ならではの問題意識を見つけていきたい。(内田由紀子)

機械に意識を移植することも不可能ではない、という議論がある。100歳を超えて長生きしたいとは思わないが、1000年後の未来がどうなっているかには興味がある。自分がロボットになってもかまわないので、一目見てみたい。(阿部修士)

持てる知見を駆使してより便利なものを作ろうとするのは人間の一種の性だ。そんな中から生まれたロボットがAI化し始めると、多くの人が感嘆しながら同時に恐怖心を抱くようになってきた。それでも人間の創造欲にストップがかかることはないだろう。(原 章)



京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER · KYOTO UNIVERSITY

こころの未来研究センター

